



## ●チベットから我田引水

深刻な水不足に悩まされる中国、その解決策の一つとしてチベットの水を黄河の源流に繋ぐ計画を真剣に検討している。

その計画によるとアジアの水塔と呼ばれているチベット高原からインド洋に流れているメコン河やヌー河から取水、チベット高原を貫く導水路を造り、中国黄河の源流に繋ぐもので、トンネルと水路の長さは合計300km、費用は4兆5千億円、2010年から着工し、第一段階では40億トン/年、数十年後には170億トン/年を取水することを目標にしている。

当然、国際的な環境学者やチベット住民を擁護する支援NGO等から「この計画は自然破壊につながり、チベットの自治権を奪うもの」として反対を表明している。

なぜこの様な計画が持ち上がってきたのか、黄河の水が海まで届かない断流現象が頻発しているからである。1970年以降、繰り返し断流が発生し、

1997年には13回の断流が発生し、合計226日の断流日数を記録している。

なぜ断流が頻発するのか、それは黄河流域の降水量の減少と、急激な経済成長の結果、水の使用量が50年代と比べ1.8倍にもなっているためと云われている。また黄河流域では、地下水位が急速に低下。1990年代初期には、毎年1.5㍓と公表されていたが、今や場所により3㍓にも及ぶ早さで低下している。

水量不足だけでなく水質悪化も急激に進行している。経済開放後、黄河沿岸地域に工場が林立したが、工場排水の処理率は21%以下であり、1993年の統計では41.7億トンの未処理の工場排水が黄河に流入したことが報告されている。さらに2000年以降、水質汚染は加速度的に進行している。

事実、流域の村ではここ10数年、悪性腫瘍やガンで死に至る住民が急増し、また先天的障害を持つ子供が増えている。

中国政府は昨年(2006年)の7月、今後5年間で環境対策に21兆円を投入することを表明しているが、早く手を打たないと黄河文明で栄えた中国は、黄河の水で文明が減びることを証明することになるかも知れない。

(Y)